

氏名	EUM Haeran (オム ヘラン)		
学位の種類	博士(芸術)		
学位記番号	甲第46号		
学位授与日	平成25年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目	記憶による創作活動についての研究 —芸術における記憶のイメージをめぐって—		
審査委員	主査 教授	西嶋 憲生	
	副査 教授	諸川 春樹	
	副査 教授	室越 健美	
	副査 佐藤美術館 学芸部長	立島 恵	

内容の要旨

人間にとって記憶とは単なる過ぎ去った過去のことではなく、その人のすべてを意味するとさえ言える。そして自分の記憶は自分を証明するものであり、またそれに頼って生きている。生まれてから今までの人生で経験する沢山の出来事は一般的に我々は脳と体で学習・習得し、記憶として保存される。そしてそれは生きて行くうえで不可欠な情報として生かされる。

しかしながら記憶は、コンピューターのように符号化して保存され必要な時に検索して調べるようなことはできない。人間の記憶は時間が経つにつれ稀薄になり、消滅したりする。人生で経験する多くのことを忘れつつ生きているとも言える。従って我々は記憶に頼りながら生きてはいるが、記憶というものをあまり信じてはいけない。この記憶の大きな特徴を私は「記憶の不確実性」という言葉で表す。

忘れるということは覚えるという能力と同じようにとても重要なことだと思う。なぜなら我々は忘れるということによって忌まわしい過去を離れ幸せを感じることもあるし、忘れるということにより不確実さ、曖昧さは創造の可能性という門を開いてくれると思うからである。私はこのことに着目しており本論文を書く動機にもなっている。忘れてしまったある記憶を呼び起こすために、何か関連して思い当たることを考えたりするが実際にあったことをありのままに思い出すことは難しく、そこには必ずと言っていいほど思い出、記憶を「作り出す」ということが介入してくる。そして記憶を「作り出す」ということはまさしく「創造する」ことに繋がる行為なのではないかと思う。

人間の記憶は単純なものではなく不可視なものであるため、それについて言葉で語るのはとても難しい。しかし、はっきり見えない不可視なことだからこそ最も興味を

引く対象にもなり、それゆえ、長い歴史の間、多くの芸術家の表現の対象にもなった。

私も記憶の不確かさに興味を持った。記憶の不確かさを利用するなど私の作品制作に大きな役割を果たしている。経験された事柄とはつねに過去の出来事である。過去はただ過ぎ去った現在であるが、何らかのきっかけで思い出されてよみがえる過去は実際の過去より力のある何かになるはずだと思っている。

私は制作のプロセスでその「思い出された過去」を表現するために、わざと記憶を忘れたりぼかしたりする工夫をしている。そしてその曖昧模糊とした記憶から生じる誤差を、さらに拡大、展開しつつイメージを作り作品として表現する。そうして作られた作品の中の世界は、私の過去の出来事、記憶から生み出されたものでありながら、作り上げられた「虚構的空間」になるのである。

私はある人のことを感動的に描き出す伝記作家と同じように事実・想像・記憶を上手く調合して見る側の情動 (Emotion) を呼び起こすような魅力的な作品を創りたいと思っている。私は本論文を通して、私の作品及び、他の芸術家の作品に表れるそれぞれの記憶のイメージについて考察する。記憶というものがどのようにそれらの作品に表現されているのかを追求すれば、そこから記憶と創作活動との関係も明らかになり、制作上の方法論というものも吟味されるのではないかと考えている。

私は人間の記憶には創造能力があると考え、その能力に興味を持っているのだが、第一章では、なぜそう考えるのか、どのように記憶は創造に繋がることができるのかについて考えてみた。そのためにまず記憶に関する自分の卑近な経験から述べて記憶の本質に近づこうとした。そして記憶の機能的な重要性と記憶の忘却がなぜ起きるのかを考察し、忘却による記憶の誤謬と創造の関連性を導き出そうとした。

第二章では、第一章での「忘却が創造のプロセスだ」という前提を立証するため、主に記憶をテーマにして作り上げた作品であるマルセル・ブルーストの小説『失われた時を求めて』と美術家ジョゼフ・コーネルの作品を取り上げて論じた。芸術家にとっての記憶は、芸術活動によりその表現を可能にし、絵画なり、造型なりはたまた音楽のスコアなり具体的なかたちとして何らかの意味を持つものとして長く保存されることになる。そしてその考察過程を通じ、再び記憶の本質とは何かについて迫ろうとした。

最後に第三章では、自分の作品を中心に記憶の問題を分析した。ここでは不確実な記憶をどのように呼び起こして自分の新たな創造物として引き出すことができるのか、そしてそのためにどのような制作方法をとるのかについて述べてみた。

本研究では、不確実な記憶が創造に繋がるという着想をいろいろな角度から分析してみた。この研究は、これまでの私がとってきた方法というものを確認し、それを基にこれからの作品制作の方向を正しく設定し、更に新しい可能性を模索するためのものである。その結果として私の表現する作品が少しでも鑑賞者に響き、共振し、交感を呼び起こすようなものになることが私の目標であり、課題なのである。

審査結果の要旨

オム・ヘラン（厳慧蘭）の絵画作品は、取り残された夢の一場面のような、不思議な感情を見る者に抱かせる独特な作品である。そこには、しばしば箱もしくは何らかの囲われた場所（作者の言う「コクーン」、自分が安らげ保護される空間）が現われ、そのなかにさまざまな事物やときに人物（身体の一部）が描かれる。鑑賞者はその多様な事物や人物をたどりながら、自身の中で物語をつくりあげることになるのである。この独特な絵画の世界は、作者が書きとめておいた単語や言葉を時間が経ってから読み返すことで新たに自分の中にわき起こるイメージや感情を画面上に描き出すというプロセスを介して創作されているという。それを作者は「記憶の不確かさや誤差を利用した方法」と言い、そこには記憶を想起する行為の中に含まれる創造性が含まれていると考えている。

オム・ヘランの学位請求論文「記憶による創作活動についての研究-芸術における記憶のイメージをめぐって-」は、この自作の創作のベースとなっている記憶と想起の方法について論考すると同時に、より客観的に記憶のメカニズムの不思議さやそれを意識的に作品に導入した芸術家（マルセル・ブルーストのような事例）を取り上げ作品と記憶の関係性を研究したものである。さらに、それが自作においては「箱」というモチーフにつながることを、コラージュや箱のアーティストであるジョゼフ・コーネルの美術作品や安部公房の小説『箱男』を参照しながら考察している。

オム・ヘランは論文の中で、まず人間は「記憶のおかげで自分の存在を確かめることができる」とし、記憶が一人の人間の存在の根幹に関わることを脳損傷による記憶喪失者の実例を引きながら述べるが、同時に「記憶は、コンピュータのように符号化して保存され必要な時に検索して調べることはできない」もので、時間が経つにつれ衰退したり消滅するので「忘却」は避けがたく、そこから彼女の主関心である「記憶の特性である不確か性」へと話を進める。

それは記憶の本質的な不確かさ、不確か性の問題であり、まさに「人間がすべてのことを完全なかたちで記憶することができないために起きる記憶の誤謬、あるいは作り出された記憶から人間の想像や創造能力が誘発されるのではないか」と考え、記憶と創造性の繋がりを探求していく。そのさい、情動・感情・感覚(emotion, feeling)といった要素にとくに着目している。

この問題を、第二章ではより具体的に、マルセル・ブルーストとその代表作『失われた時を求めて』を取り上げて、感覚や夢から呼び起こされる過去再現の現象と小説の中での芸術創作の関係をたどる。マルセルの感じた喜びを「現実時間の束縛から解放された過去の記憶の空間で作り上げられた（創造された）もの」と捉え、創造とは無から有を作り出すというより「内面に潜んでいる本質を見つけ出す発見に近いかもしれない。そしてその本質を表現することにより、一瞬の喜びを現実の作品では永遠

に固定することができる。これが芸術家の使命であり、いかにこれを表現するかは芸術家固有の権限であると言えるだろう」と指摘する。

さらに、ジョゼフ・コーネルの記憶のイメージや私的な親密性にふれながら、コーネルの箱を単なる容器ではなく「幼い頃の思い出そのもの」と捉え、「箱の中で自分の大事なある瞬間を入れて保管したかった」のではないかと論を進める。

こうした考察をベースに、第三章では、自作における記憶の役割や記憶のずれ・誤差を意図的に導入する自らの方法（記憶の収集、再読、表現）を、具体的な作品を取り上げながら解説する。現実の出来事に関する記憶をベースにしながらも、メモされた言葉の断片から新たな情景や感情を想像していくことで「実際より強い生命力を持つ物語」が生まれることを述べ、「私の制作過程には思い出しにくくなった記憶をどうやって補完し豊かな想像を交えながら、生き生きとした新しい記憶として再生させるかがポイントになっている」と分析している。また、「箱」についても、「箱空間」という広義の概念（我々が生活する空間もすべて広い意味で箱と言える）で捉え直すことを通して、「自分の作品における箱は記憶の一部を表すともいえる」と述べる。

結論的に、「偶然に思い出されて、現在に再生された過去の時間は、実際に過去に起きた現実とは異なるもの」であり「それは実際より美しくより豊かなものとしてあらわれる」として、「その過去を表現するために、私は制作プロセスとして記憶をわざと消したり、より不確実なものにしたり、想像をより豊かにしたりする過程をたどり、作品を作っている」と言う。その方法については今後も時間をかけて追求していくが、「その結果として表現された作品が見る側に響き、共振し、共感を引き起こすものになるよう、さらなる研鑽を積んで行きたい」と結んでいる。

ここで論じられた問題は、作者の方法とは異なる形で無意識を導入しようとしたシュルレアリスムにおけるオートマティスムなど「無意識的表現」と記憶の関係性にまで発展させて考えることができるものであろう。しかし、本論文の範囲内で評価するならば、自らの創作原理として記憶を捉えた論文内容と実技作品とは密接な関係にあり、問題を多面的かつ緻密に分析しており、引用・参考文献も適切である。したがって、本論文をきわめて明快で、説得力のあるものとして、審査員全員の総意により、博士学位授与にふさわしいものと判断した。

（西嶋 憲生）